

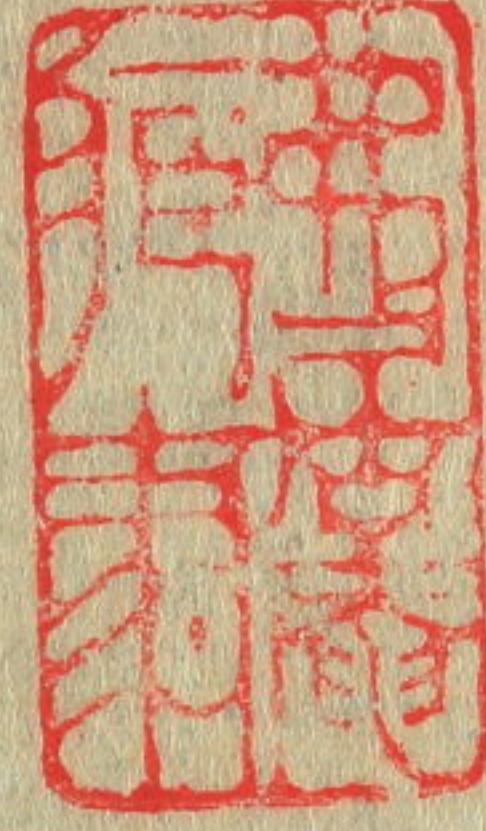


重 鐫

日本歲時記

秋





日本書紀卷之五



秋

陽書律曆志云秋之始也... 氣之清也... 乃曰秋也...

秋之月... 秋之月... 秋之月... 秋之月... 秋之月...

運水時を肺氣とわゆり冬食泄となん

老を論よりく夏乃末秋の初勢よりするま

子時衣をぬき裸よりて寝て食するなりれ五

腕の脇穴皆背より多しを人よりて扇をわく

風と取又衣多足と露せし風背より入中風の

深く衣切ぬこれとけり一欠より一疾ありと

そへハ八味地黄丸と服と一二百と忌

月令廣義よりく殊三月收斂して夏陽統縛す

多事なりれ

授生偏よりく秋氣を燥なり寧く胡麻を食

てろれ燥と潤と一

書生論よりく冬衣とる事甚るやとるの因

疾を瘡瘍と多し新穀初と熟一なる時老人

これとくハ宿疾とぬす事多し新米に

食ハ風氣と和しより又早稻ハ半熟セ

時よりてやと米と和者美なりとるれと宿疾

数ハ瘡瘍と多し能脾胃とやゆ

病ハ害多し

月令廣義よりく秋者多し老人精足ハ少ゆ

事と是ハ微火と用と足とをわゆり一太

契^せせしむるうかりぬきうくも代^たハヤみのとあ
小見^{こみ}た^らやく火^ひの火^ひりす

振^ふる痛^{いた}いしく候^け乃^の男^おき^きる水^{みづ}とのとあ^ありた
衣服^{いふく}と忍^{しの}事^{こと}と忍^{しの}

金^{かね}匱^{けい}要^{よう}累^{るい}いしく秋^{あき}九十^{きゅうじゅう}日^{にち}金^{かね}穀^{こく}乃^の肺^{はい}と食^くへり
ま東^ま垣^{かき}りしく古^こ人^{にん}の云^い秋^{あき}薑^{しょう}と食^くるうかり人^{にん}と

志^し氣^きと信^{しん}せしむ晦^{えい}唐^{たう}信^{しん}保^ほす又^{また}林^{りん}薑^{しょう}の
天^{てん}年^{ねん}と天^{てん}乃^の子^し強^{きやう}乃^の孫^{そん}子^し遼^{りやう}りしく九月^{くがつ}

お^おりく薑^{しょう}と食^くへり妻^{つま}より下^{した}り眼^めと患^{うれ}事^{こと}と換^か
願^{ねん}力^{りき}と減^{げん}す

七月

立秋ハ七月の月を暑ハ七月の中○七月の美名 七月二無
律と夷則と○七月の和名と文月と○七日
すれこまむとてあまことむく
也よまつとてあまことむく

六日沐浴

七日七夕と云又^{また}星^{せい}夕^{せき}ともいふなり新^{しん}葉^は室^{むろ}家^け時^{とき}記^きより

七月七日織^{おり}女^{むすめ}牽^ひ牛^{うし}夜^よ半^{はん}乃^のあり

五^ご雜^ざ紀^きより凡^{おほ}織^{おり}女^{むすめ}牽^ひ牛^{うし}の事^{こと}續^{つづ}新^{しん}葉^は室^{むろ}家^け時^{とき}記^きより
言^い言^いとわけ物^{もの}志^しハ無^な槌^{つち}乃^の浪^{なみ}後^ごと記^きせり
志^し人^{ひと}女^{むすめ}の信^{しん}く思^{おも}ふとふさすなり人^{ひと}
星^{せい}土^ど乃^の常^{じょう}夜^やう天^{てん}上^{じやう}乃^の列^{れつ}宿^{しゆく}とて汚^け蟻^ぎと
穢^けしむるを亦^{また}やしむるを一^{ひと}所^{ところ}なりとあ

せりつひ碓氷碓氷と云つる一仕事なりやまを
よ久しきとありてい何人をもおとせ
るやとて命符寄の料う一俵のけいはい
ありとせりつるれりなりけき一とあり又
い事なりとてこもたぬきこれとて
いふ天とせられさなり新株代金と風相
をね多し寄寄の料を俵何りいの人々
仕事なりとてせりぬう又信よきふ
二星ありといふ案時雜記よ七月七日の辰
酉うし辰とてなりとてとわより信えぬや

セタ乃うの美華集よりかひく一仕事

りよ川水けきの様風ぬきとていふ

古今集より凡河内躬恒

年といふとてセタ乃ぬうのひつとていふ

もつて風無風

契ふとていふセタの年とていふ

終指集より指大納言実家

けり世地なりとていふ天のわき

新拾遺集より藤原左大臣

いづれを結ぬらなりやセタの信よきとていふ

新法撰集より治新王

まふ所ふ所をわく一友乃たえ世契れり分かれハ
七夕乃の杜牧

雲際月地一とおもふ来抵經年引恨多最恨明朝
波車雨不致回脚波天河

又 呈井原

重帷半波斗柄移驚鳥懷の移遷是使精衛
填河漢一水還無有幾時

又

織女牽牛雙扇開年一一度河東言天上

猶お見と猶勝人間去不回

○今日索餅とくふ事りう十節記よりむう一
氏乃おみ七月七日又記する毒鬼邪となり今瘡
病とやうむうれぬ日はぬま餅とくふ一めみ
そを白よりりく索餅とくふの毒とすつ後
人これ日索餅とくふの瘡痛とくれえり

は後たりたりあるとくす此瘡ハ外風を
暑溼の感一因飲食色慾の傷れて病りとの
因後母を夏傷れ暑秋の瘡瘡とくふよりあられ
く瘡生せりとのづううはうくうんたといふ

日索解と食したまふとて病根をよす所一か
るれ受とまぬる事ゆんや決してこれ程
そ世の人か何言と作とく

○今夜二星とあるとて凡果とほね食物をまの
香ねとてまへ半のくい五色の糸をつらねて
ちと男やとて本能の橋といふ所をこれと乞巧
歎といふなり或衣服と膝し書とてさういふ事
ありは事日本よりて天年勝寛七年いふあり
しとて事根原は又とて
織女を乃彼衣を
はきし事なり又
七夕はふゆとて留丹を芋乃悉れとて

て枕の夢よわくし新勅撰集の奇は

あまのあまの玉はまの枕に枕なりとては
乞巧奠乃事兼財花風を花とてははれこれ
又うれぬ久しき事なりとてそれと婦人女の
たもまにば事とてははれ可なりとてははれ
乃とてははれ可なりとてははれ可なりとては
の団子とてははれ可なりとてははれ可なりと
院威を撲鼻裸とてははれ可なりとてははれ
今多事とてははれ可なりとてははれ可なり

七夕の昔れ家といふ人なるといふとあはれ

激々受りて又乃て得ぬ

天と地と塵と此物。万世蕃敷。新秋。送。来。世。事。
多見。誠。不。留。人。間。乞。巧。機。

揚。扑。ウ。七。タ。レ。精。キ。

禁。令。年。半。言。若。何。頭。過。紙。書。并。金。校。年。乞。興。
人。同。巧。不。過。人。巧。亦。多。

○今日。革。丸。と。合。せ。麴。と。作。て。う。し。と。雪。以。月。令。よ。り。ん。こ。
たり。は。日。皮。裏。と。曝。せ。ハ。垣。底。と。雪。後。七。織。に。も。り。
又。角。蒿。と。取。て。毡。襦。書。籍。れ。巾。よ。玉。の。盡。と。碎。く。
お。塾。事。親。よ。り。ん。こ。り。

十二日。二日。より。今日。まで。乃。万。年。より。日。毎。一。日。
懺。悔。と。拂。ひ。雪。還。と。なり。て。塵。埃。と。た。る。も。な。す。
へ。一。九。懺。悔。と。な。る。一。年。に。二。三。ひ。たり。が。
よ。一。冬。懺。悔。と。ほ。く。と。し。と。日。々。く。天。帝。を。
よ。う。う。さ。し。事。多。き。れ。い。疎。略。あり。い。月。い。日。より。を。
よ。く。日。々。く。悔。れ。と。な。る。ひ。た。る。ひ。て。よ。し。
○昔。人。の。乃。懺。悔。と。な。る。も。な。り。あ。る。お。や。う。こ。み。
る。より。酒。市。も。と。お。り。又。客。と。な。る。ひ。き。り。あり。
と。乃。世。より。う。し。や。り。と。ん。今。乃。世。俗。よ。り。う。し。や。
たり。た。せ。る。人。を。な。さ。む。と。ま。つ。る。は。今。の。人。と。

おるがうれしきものなり後たうし

○今世世俗人たに魂のするおろく火と燃し
のりあき燃るる何う思ふ思ふをせむるは
士思ふた人を知りてあせさるや佛氏乃て
まゝいふまゝと我れを乃て我れを来降す
かゝる事とあは人多くしにわたり
こそゆるされいふ難れも中元乃て我れと
一ふゆる人冠服とあきつて外に出る
揖讓し神と争て入参すて又これと送て
乃海とあきいれと我れとわたり

つをわたり事のゆかり

十五日今日と中元と云國俗蓮華飯と餐して本家

は餐し親戚ふと云 揚子江に事ありて今世七月十

後代度る事乃公卿本行工巧也今人乃て作の國祭か其前

の祭に中貯難糖果食注目蓮華飯を食之其之を食ふは

祭に中貯難糖果食注目蓮華飯を食之其之を食ふは

祭に中貯難糖果食注目蓮華飯を食之其之を食ふは

祭に中貯難糖果食注目蓮華飯を食之其之を食ふは

祭に中貯難糖果食注目蓮華飯を食之其之を食ふは

祭に中貯難糖果食注目蓮華飯を食之其之を食ふは

かくけはくしなりし事く久しとや言ふ聖人乃
 道よわくをせ禮義なりせいぎ西道さいどうよ志こころある人ハ人ぞ改あらた
 たりきあまのこころ轉かへり親おやの儀ぎをみよむ
 聖月せいげつ上うへ有あ鵬ほう志し願がん改あらた主しゅ儀ぎ基もとる用もち
 して儀ぎよきとあらしとて先祖せんその靈れいを食くらふ能あた食くらふと
 する墓はか取とりしと孫そん墓はか前まへに焼や焼やとい焼やすト
 先祖せんその靈れいを食くらふとする身み疎そ落らくして祖そ先せん之し儀ぎ
 ありし墓はかより孫そん親おやある人ハ人ぞ改あらため
 する如ごと親おやある人ぞきしとあらしとて改あらためたり
 たりし事く久しとや言ふ聖人乃

より乃風俗と云ふ事と云ふ事と云ふ事
浮屠氏目蓮の事と海合して之傳へ孟榮宣經
才と云ふ書と傳へて西儒とあはむくや我國
あり孟蘭盆の儀あることと事聖武帝の天平
四年に始りしより續日本紀に見えたり年中
行事記を代寄りと云ふ大綱を

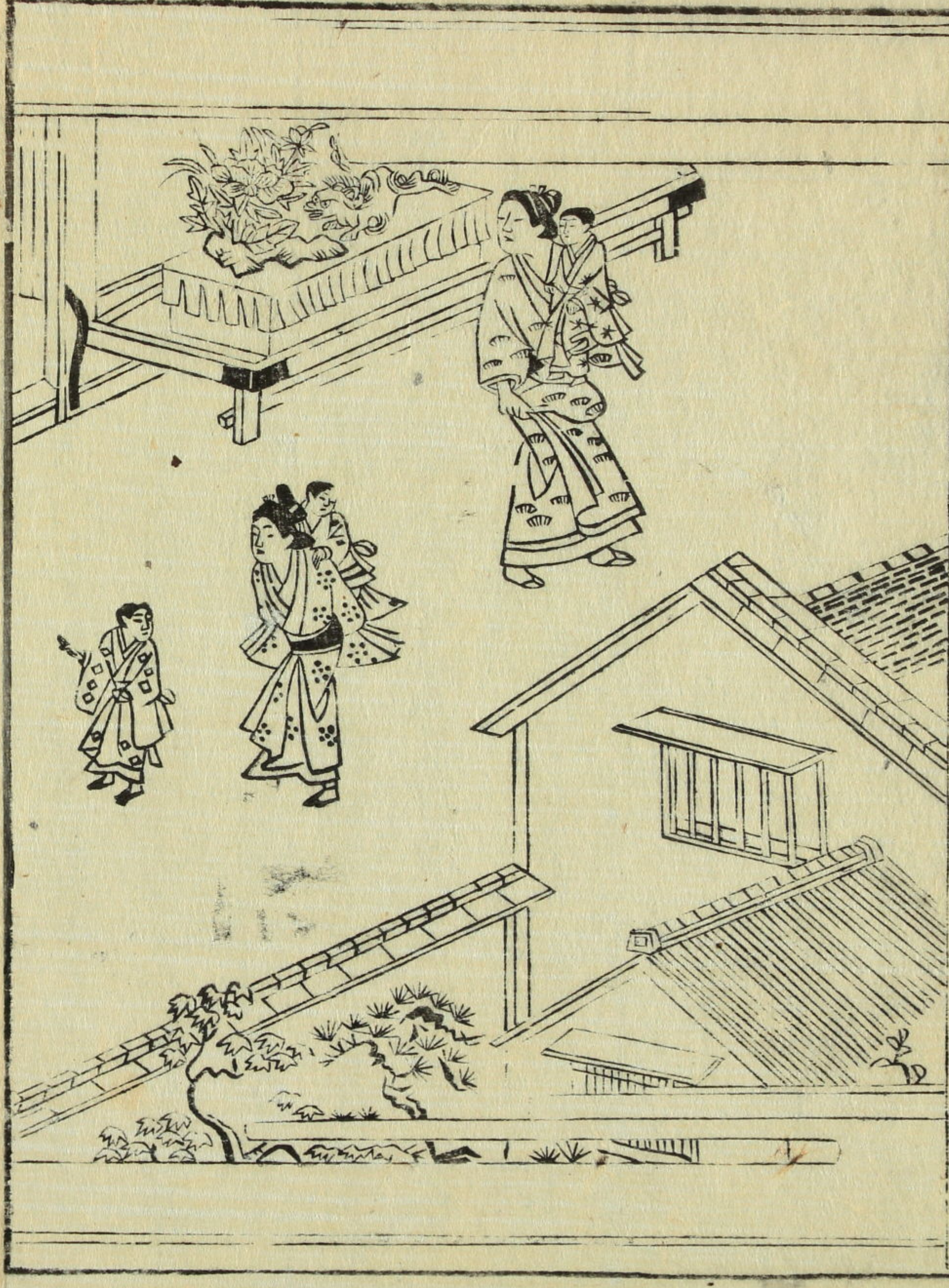
ききくや肉花はくくやゆき玉ききくや月かきく

○五雜俎云々七月申元日孟喜会となり目達り
母儀鬼ははのき逆さかみ漏もるなりけ功徳くどくと候むかひく佐さの儀鬼ぎと
志しく食くとるなりとひきむとより世俗しよこたひ陰曆

乃後いまだうつくもがてうそれ祖考の天堂に登り
極楽世界ごくらくせかいなる事と望みずして餓鬼うがきなり
てこれとすつるも夢の泡に甘きなり

○能書より十七八載さく高坊ふあゝの戸の焼
 竈と燃す教工と考てあぐり物と考て人
 の足りたるに市元ふ焼竈と燃するは堀門院裏のあ
 りよりあらうにそ家乃初申元下元とてふ焼と燃すより上元
 のよりくそりしをも遠他の間へおくるてめてを
 又雜紙よりなり

○又と日世伝の海乃漁獵とせ候るるを以て
よや店にやの百々ひやひや衆しゆ中元日牝佐網めづな不す採魚とくぎょとてなり



十六日 國信は日男女の遊樂と事とす又やどゆいて
奴婢のいふことありてあふりて母兄才又對面する日
○今和を養育する者壁に並ひ月と對面せしむる
秋三月とてふ月必書の時なり八月十月九月
十二夜を月と書する元祿なりたゞ七月のとき朝
たし好事なり人の事候ふ所とてふこと今夜は
月と對面とて事なりあふり

晦日 沐浴

は月夜涼冷なり衣と厚く着て風候に傷れり事
なれなれ万勝理子も表氣うとて去る風なり

感いやり 感冒傷寒 痰嗽喘急の病せり
てこれと避へ

は月を標とて冥々 標漆と取
と去りてく標漆を以て水引きみ合入
又たちやうたりかす水といひりや入る氣と五日
陽てく四日と常り日ちやうも二日あるなり各別
是より入る一凡標漆を久しとけいやくと
それなり壺より入る水とけいやくと結ぶなり

又桶の竹筒にへて他はひいて蓋をとり又蓋の桶へ入
板とる内へさくくちをた減く減く若板より下りその
より板蓋とて常たてくかてとて一め此とれハ
やき取むす耐え且記より穴とけまろきより取ばし
わくあ栓とさすなり又桶へ入るるきと人乃船タ
通る蓋床へる垂ハ動揺して揺せず
天氣好時た代敷せり付漆く奴僕へ命一志紙を
他へ懸く一敷法定敷くより面より紙とてひ
めりお敷へ水ぬくた紙のくひてひて堅きとて
さばく蓋一又中へ用ハ反板とて一むすめくも

全紙をそち目よりあひひもひのり又ハやき取りよ
あぶ加えてのりくちくつぎばけくきき一これハ
ちとくぬきすくくくくくのと水へ入りとて
て二重は堅め敷板のくくむきりめきくよと紙で包
換原板よりくより火とたは紙付かみ取がくくた
らして細くとりくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
て口方ちくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
とくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

そく二返目をそよふきひろぐりぬれぬあさうぎり紙
のこぎりとまきとひさあさうぎり紙とこぎりと
ひろぎとまきとぬれぬあさうぎり紙とこぎりと
ひろぎとまきとぬれぬあさうぎり紙とこぎりと
ひろぎとまきとぬれぬあさうぎり紙とこぎりと
ひろぎとまきとぬれぬあさうぎり紙とこぎりと
ひろぎとまきとぬれぬあさうぎり紙とこぎりと
ひろぎとまきとぬれぬあさうぎり紙とこぎりと
ひろぎとまきとぬれぬあさうぎり紙とこぎりと
ひろぎとまきとぬれぬあさうぎり紙とこぎりと

初のかみたるを飛とよふ一層んよりけりこたれこ
ろくして毛もろくそあわす一軒とぬきぬき
てろくのあさうぎり紙とまきとぬれぬあさうぎり紙とこぎりと
ひろぎとまきとぬれぬあさうぎり紙とこぎりと
ひろぎとまきとぬれぬあさうぎり紙とこぎりと
ひろぎとまきとぬれぬあさうぎり紙とこぎりと
ひろぎとまきとぬれぬあさうぎり紙とこぎりと
ひろぎとまきとぬれぬあさうぎり紙とこぎりと
ひろぎとまきとぬれぬあさうぎり紙とこぎりと
ひろぎとまきとぬれぬあさうぎり紙とこぎりと
ひろぎとまきとぬれぬあさうぎり紙とこぎりと

よりて宅中へハ乾蔓草とすくまけハ露食なり
 ちて八月の後まてハ一蘿蔔を食すくちこれ
 ちやく所なれ根ぬ一七月初まてハ一蘿蔔辛
 蘿蔔を蘿蔔と同所より一ちてハ根より
 宅中へハ生をくちなり一よく所より一胡蘿蔔とハ月
 乃初まてくちなり大葱少葱等ともう四六葱苗
 とわりちうち少葱ハ根とう四
 月乃末まて皮とむむは法ま橋と取たりと去皮
 とむ日又乾す

此月蔓草と食するかられそより喝農所より人と害す

食ハ目と採す麻稜をくハハ氣とくハハ氣更
 とくハハ氣とくハハ氣息氣とくハハ氣食ハ人と傷
 暑と食ハハ氣とくハハ氣生密とくハハ氣食ハハ氣
 乱を食ハハ氣とくハハ氣生肉多ク食ハハ氣
 と採す之秋乃後若餅及水波餅と食さる
 ち秋乃後十日凡と多食よりハ
 ち七月暑熱多くとくハハ氣冷水とくハハ氣香くハハ氣
 南時暑なりとも後日よりハハ氣生す又ハハ
 月乃乃後暑多くとくハハ氣生冷乃物果多
 と多ク食ハハ氣生乃氣生又生乃生

まじけき忍よとて候

七月十六候才一強風玉才二白雲津才三雲霞

太秋の二候なり才三白雲乃金才五天

姫肅才六禾乃登才七雲才八候なり

立秋昼中六刻十分夜中十二刻中十分

昼中四刻十分夜中十二刻中十分

八月

八月の節候は八月の中。八月の月名は仲秋。八月の節候は八月の中。八月の月名は仲秋。八月の節候は八月の中。八月の月名は仲秋。

朔日倍の朔と云今日たのそとて人よ物と違ふ

事ありては根はよとてこれるを更なる候なり又

西遊少をわす世俗の風儀なり或假名記に建中

年号乃此よりい事ありては先八田のそとて人

とけぬむとて人なりとて人なりとて人なりとて

とて又天明も大関れ又承の記は七八年より家

跡は天下に流布せりとのき終りては建中

此乃事なりとて或は後法皇院のそとて人

て和威通方とて人なりとて人なりとて人なりとて

さたりとて人なりとて人なりとて人なりとて人

内々此のありきるをとも傳へりうんこまを
 色たのたふ事なりまのまゝなりたる年
 記を分明なるに上へは後醍醐天皇乃由世に
 よりなるなりたるや細くも今年中事此中に
 三つありたる事なりとてはしる事なり
 一はもとて所をぬくも是の事なりとてはしる
 二は海とて大なる事なりとてはしる
 三は又時を明の四季抽換よとてはしる
 一はまたむねのいふとむねにけり
 二はまたむねのいふとむねにけり
 三はまたむねのいふとむねにけり

一はたまたむねのいふとむねにけり
 宣ふ乃ちむねのいふとむねにけり
 一はたまたむねのいふとむねにけり
 宣ふ乃ちむねのいふとむねにけり
 一はたまたむねのいふとむねにけり
 宣ふ乃ちむねのいふとむねにけり
 一はたまたむねのいふとむねにけり
 宣ふ乃ちむねのいふとむねにけり

の物故れ後より多き事始まる事一は久しき事
より人傳りされども延壽式は家傳事なりと見
え原すなり國史よりあはれされはふりて是
傳り然る事根原の故とやふとて一とて
近世より中より長の事物故とて書う
ふりてハ傳書する人の筆力もとりて事
をせしむる事多し今書より用ハ考
ゆふ事又今いふ事秋ハ西穀ハもの
とてふ事ハ田のつわりとて事ハ
ふりてハ月朔腰となす候とて臍とて

月令廣義潜確類書より入るる臍ハ田穀ハ新
かりとて秋ハ穀なりとてハ月ハ朔の初義とて
ハ穀なりとて事ハ

○今日 楚社より 將軍家より物故り又 將軍家
より物故りとて事ハ

十四日 明夜の夜陰なり八月十日に在るなり

能く見ゆる事なり。玉蟾初とて秋圖の時陰陽意
陰先貴明夜陰陽未可なり

十五日 中秋といふ秋九十日ハ中なりとて國信

今日の情事乃ちありしを教養とすべし事人
皇十四代元正天皇乃所立皇徳元年九月又大隅
日向を圍取送すこれより西國より諸軍を遣は
し彼等乃所立幸勝勝波豆采部軍と引率あ
彼國を征し事ありし教とてしりりた
い徳乃所立室よは度の合戦多々人々を殺しけ
るなり事とありしを記すしこれに徳國
よりあましくい徳とてしりりし一技業記に
見えり事とありしを記すしこれに徳國
よりあましくい徳とてしりりし一技業記に

け事ありしを記すしこれに徳國
日如八月十日教を令呈す百歳其業有中國
麗部とありしを記すしこれに徳國
きかくてはれり事とありしを記すし
○今を記す秋れり事とありしを記すし
とてしりりしを記すしこれに徳國
林乃所立室よは度の合戦多々人々を殺しけ
るなり事とありしを記すしこれに徳國
古樂乃所立室よは度の合戦多々人々を殺しけ
るなり事とありしを記すしこれに徳國

月又のろくにんを骨餅と製してろくの
 状のゆる月餅と号しておとろ又月餅を瓜
 等と合して看月等とをふり月令廣義より
 歐陽詹脱月餅序云月之為餅其始大宛
 別蓋重火焚平散月餅後人散与後世名脱餅之
 於時後夏先冬月於餅季如孟秋十五於夜月
 之中餅於天逐刻定其均取於月數刻填兔園況
 埃壚不流大宛餅之始惟細地餅上蓋昇東林
 入西樓肌骨与之疎涼神氣与之清冷
 ○事云要玄月餅云とく月若水之澄神若金之氣

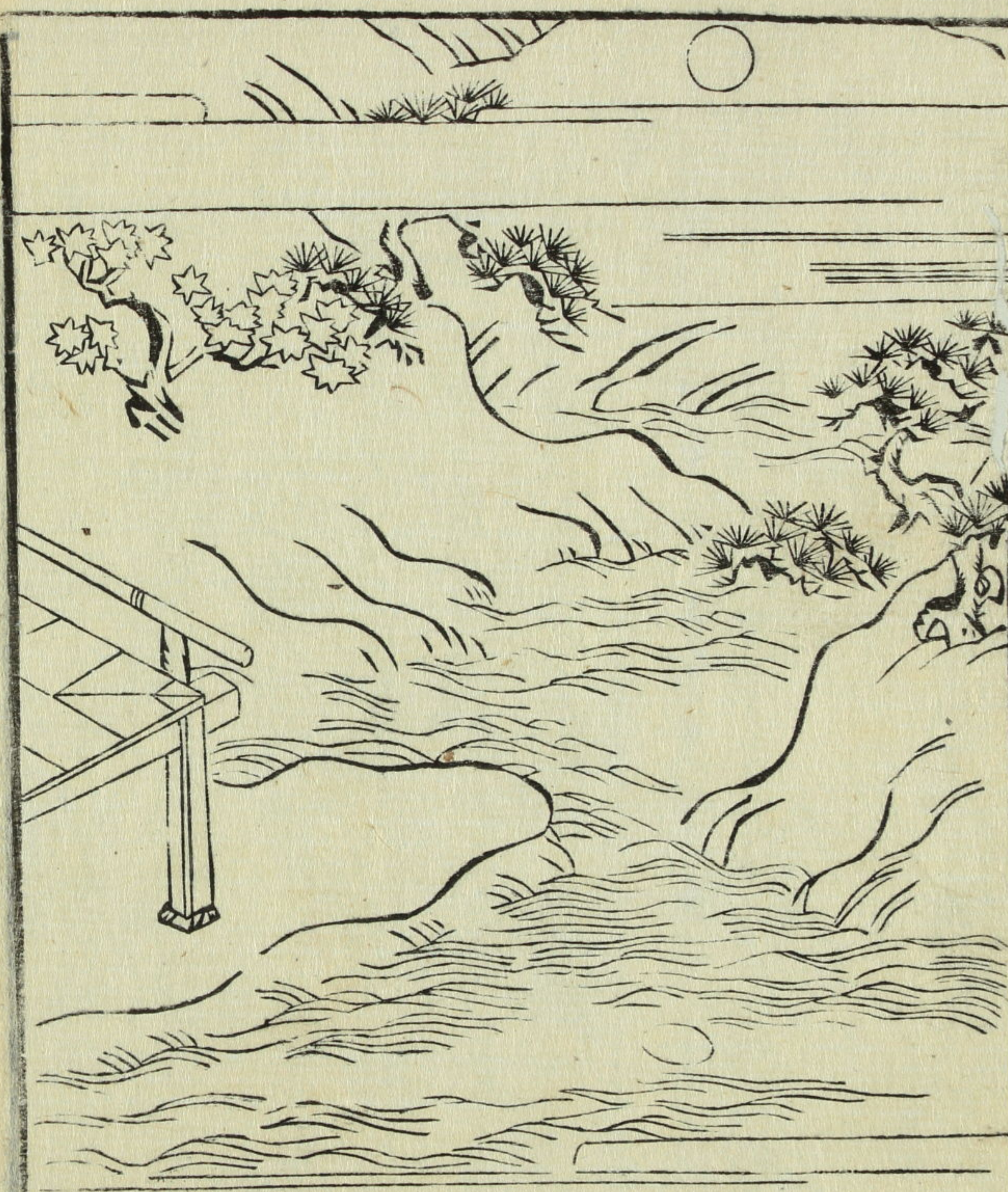
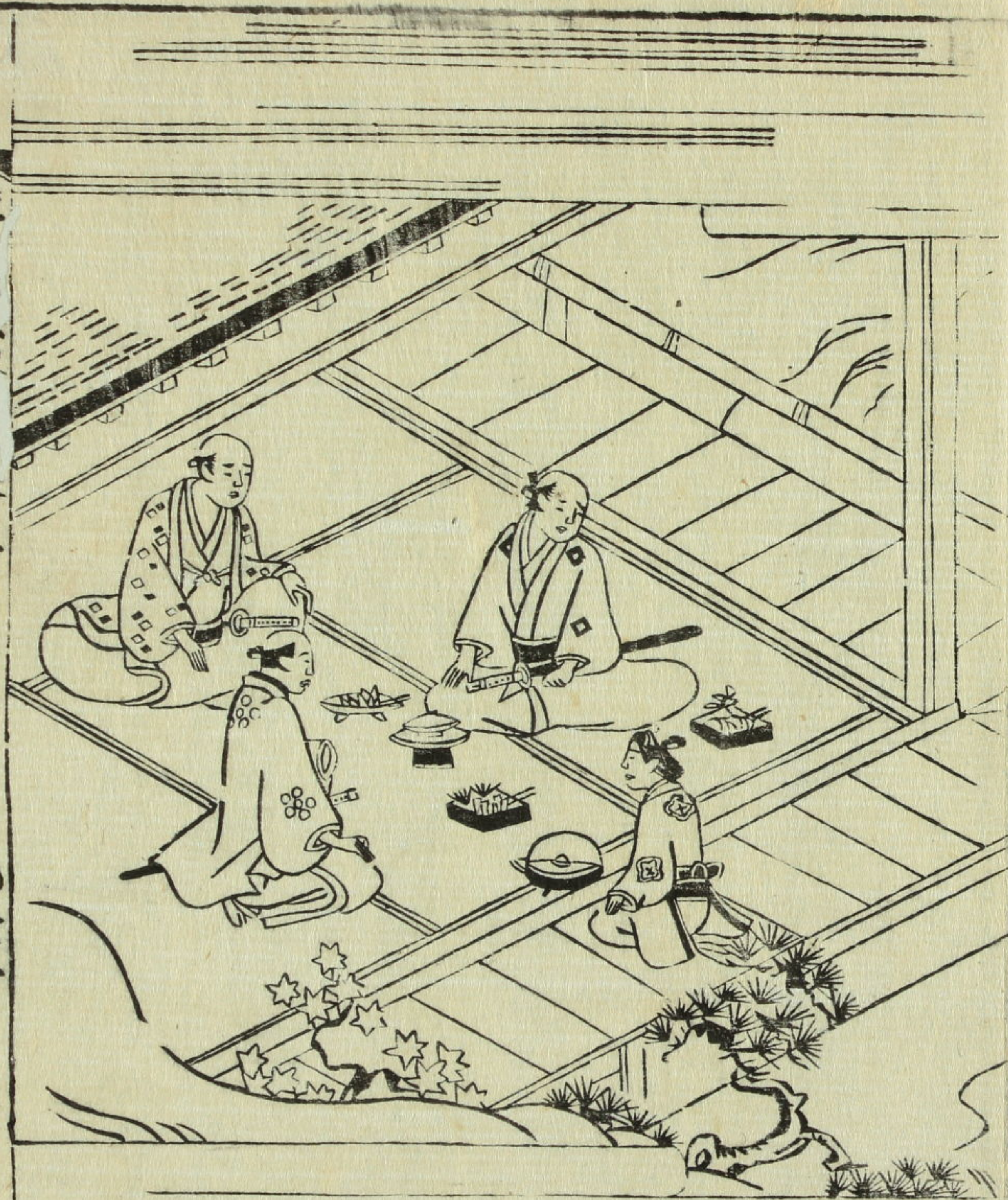
金水性也主五外分其事則知天機間取感各
 水乃金還蓋月周秋更清氣散使之於人惟不
 後方今集上天房乃漸奇

月といふ月を事と付のまひる月は月うり
 新勅撰集より中選法師

うり月と煉乃をもえぬるまひは月一をえ
 地乃一をえ元家

阿多又煉其半をえぬ一かぬ月乃をえのこ
 金多集より源親房

まやまといひなり月影とまひるぬ人よこや



張景安の中條乃詩一

可也秋定掛玉盤樓香如雪空四國此月

別是競く後一

夜池通信月生邪悲此夜易天明還雅引取

秋江水添入銅壺報曉更

秋江水添入銅壺報曉更

秋江水添入銅壺報曉更

滿目飛明鏡傳心折大刀轉蓬以地盡禁桂仰天

水路疑霜雪林樾見羽毛此時瞻白兔重欲數秋毫

邵康節乃詩一

一年一度中秋夜十度中秋九度陰未滿正須南

夜半露明仍候到天心更重照更情非淺不勝

親時意更深流芳古人詩句好何堪千里共如今

○今秋豐稔桑田海內花盛以てそのり多くと

月令度數は又さう又さく牡丹と梅一載る事

今日さう一宿さう宜う候る根と淨く洗へ

香酒といふ洗へ九妙なり

二十七日孔子乃生れ臨ひ日あり

晦日沐浴

そろろまの社日さく三秋乃後才又の成代日土乃

ころゝ瓜性阿

八月廿と播くいふは基要いふはのく元探根多いふは八月探根
至秋枝系いふは粘津洞いふは下秋採いふは宜いふは新葉いふは葉各
注其年熟也いふは二月の都るも

八月廿とそれいいふは月令度教い六月二
つと野玉いふは元探根いふは不恒法いふはういふは代皮と火
あくやいふはその煙いふはあく羊とあいふはいいふは永く不恒いふはま
若葉釋いふはの灰汁いふはを洗いふはるいふは海草いふは之いふは一
汲いふはたるも虫いふはをいふはの幹いふは後いふは柄いふは矢いふは葉いふは木いふは刀いふは等いふは葉いふはと
八月又播代釋と收まいふは一布と市いふは一紅いふはと用いふはの絹布

と染いふはをいふはるいふはをいふは外いふは用いふは多

八月天象漸冷なり多く生果と食いふはるいふは次生蒜いふは維いふは播いふは并
生蜜いふは雞いふは子いふは蟹いふはと食いふはるいふはかいふはれ又萌芽いふはと食いふはるいふはをいふは忌
書其年書月令いふは重いふは及七いふは義いふはとくいふは以いふは路いふは月いふは法いふは乃
流泉と治事いふはかりいふは人いふはをいふは一いふは疔いふは脚いふは軟いふはといふはむ
八月の古候才一いふは隨いふは風いふは才いふは之いふは急いふは雨いふは才いふは三いふは候いふは才いふは五いふは候
着いふは太いふは白いふは霧いふは乃いふは三いふは候いふは才いふは中いふはにいふは雷いふは如いふは收いふは才いふは五いふは候
蟲いふは振いふは戸いふは才いふは六いふは水いふは如いふは涸いふは乃いふは三いふは候いふは才いふは五いふは候
白露登いふは九いふは才いふは二いふは刻いふは十いふは分いふは夜いふは半いふは七いふは刻いふは五いふは分いふは秋いふはかいふは登いふは五いふは十
刻いふは夜いふは九いふは才いふは刻いふは月令度教

そと霧ハカミの雲霧降ハ九月の中○九月の曇ルに重祜^{しづこ}故月^{こがつ}
傳^{つた}くと年村^{としむら}と云○九月乃私々と出月^{でつき}といふ事やうく

夫より紀ゆゑは霜かり月とゆふと要せり。一 聖夜梅は月をえり
そより。一 九月は美名と長月と稱し。一 又九月とすて三長月と号す

裕衣

八日 休

九日
重陽と云月と日と二なり
老陽の數は奇なり

不^ふか^かい^いふ^ふく^く又^{また}重^{おも}九^く子^こ上^{かみ}田^で信^{のぶ}今^{けふ}月^{つき}より^{より}墓^{はか}を^を

又今日粟子飯と食ひ菊花酒とのむ

似たりと有り 策府雜記は二飯を湯で食糧而も湯を釜大率に煮る之
 玄加の粟亦有肉若く有り又今日餌と食六黍粒すてゝ其勢セリを熟米
 と云ふこれかへ餌として食ふこれ新と
 又おろやけみか菊花盃

阿光と勢満乃實と上勢とさるゝの事根原と

五女に於ては、
也、あるが、
いそぐ、
ゆりぬる。

今日^{こんにち}ふ^ふ光^{ひかり}里^{さと}趣^{おもむき}親^{おや}眺^{ながめ}ら^らす
おれ^{おれ}武^ぶ帝^{てい}室^{しつ}へ^へたり^{たり}は

或云卷上之抄本も此
卷より少し南無堂よりなり

後海誌よりそく
海南乃植字といふその費いんちうは房

下
之
一
也
遊ユウ亭テイ
七
或
所
費
甚
房
恒
氣

おとりくもく今茲九月九日汝が家又災ふべし

絳囊とぬひく中に茱萸とくすり骨くすりきり

ふよりて菊酒とのまむ世愛^{見ふひ}は恒糸るれ

言と信て九月に於て却て其に

をもあつてお中ね雖（かゝる）牛草（なまぐさ）さうとく

死すも此房これと云々これ其命を救はれりや
 其の世人九月の旦に毎々少くも此の菊酒との
 婦人茱萸囊と帯りてはけりといふ人
 雜記によくと九月茱萸と佩ひてはけり菊酒とのむね
 費長房桓景の事と述ふ所と教ふといふるれ其の事
 西京雜記に載す人々皆此佩菊酒の事なりて九月九日蓬
 と食ひ菊酒とのむねすといふ人々もてあるなり
 下りはてして其の事と云ふ所と述ふは蓬
 ちめとてはけり桓景の事なり又月令廣義に仙書
 と引いてその茱萸と辟邪氣と一菊酒と述ふ
 客と云ふは九月は二物とかりて酒九は元と清
 と云ふとある也
 周書に周書に九月九日律中無射の節なり數九が

るあるは俗にけい日と尚んて茱萸房と云ふは
 挿むに氣通氣と辟除して初寒とあせぐまを
 とりて是なり西京に云ふ又今日菊酒とのむね
 長房の事むね其法菊を鉢に鉢に酒を盛るに
 其の事朱紫に云ふ一とこれと醸一朱紫九月九日
 酒を取あててこれと飲ふとこれと菊酒とのむね
 西京雜記に云ふなり

○五言詩代中
 人日と述ふ上巳端年七夕重陽の中
 節も其の事なり其の俗を云ふるは月日これ奇な
 事と陽穀に云ふなりと云ふこれ古人陽と尚んて

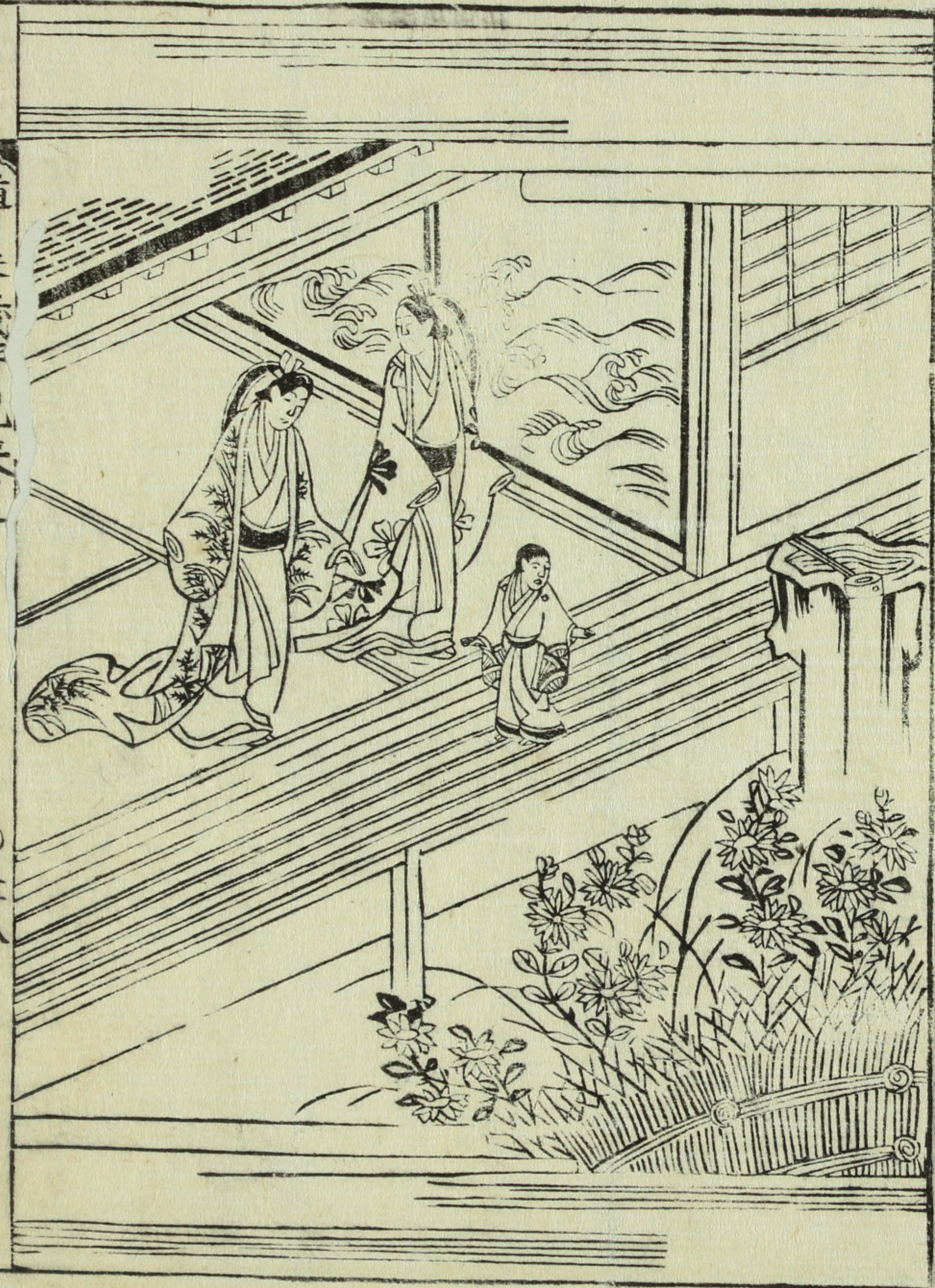
なりとあまをふにたてりは秋の——さとしに
 けりそとゆふりとまづあけのつゆに
 とあけのつゆにまづあけのつゆに
 てはゆふとすそのまづあけのつゆに

續千載集より新院別当典信

けりまけのつゆにまづあけのつゆに
 けりまけのつゆにまづあけのつゆに

けりまけのつゆにまづあけのつゆに
 けりまけのつゆにまづあけのつゆに

一見、其花は只日差、蕭然、綴り、不、禁、秋、誰、人、を、愁、ふ



三

○今日菊紀代久葉江也味甘之と取て菓子用

上より乞ふに禮式ありす

十三日 倭俗今宵月紙書けり事 中秋にきく言因
 夢ぬく後より八月十二日九月十三日ハ婁宮ありけり
 漢明方の旅工月と歎ふ良夜とすやんえりあれ
 こもふ祝他れおとととく次^{そのえ}止^{とまり}牛宮と^{うぎ}清く考より
 又月母大小あきハちづるあり^{きり}とすに^{きり}て^{きり}す元秋
 冬月と美さる時あり中秋にきりあり^{きり}の月と書す
 家佳^{せう}なりとせり我國又九月十三夜と用く月紙書

これの月乃さうと云はるるを是を云ふにけり

系系忠通 号法性寺殿 九月十三夜既月待し

用牒寂く月お陰院属寂秋望匡持お満ちる

渡雪物持家其経路云お昇十三夜新勝た教

百年完ふ衆今猶傍前折回首見清明世文價千金

晦日沐浴

は月部おして血脈と書之

上旬小少多と下旬に大差と書へし麦秋うそ

夏熱とる秋雨時乃氣とくはと月令廣義より

地肥饒なるを云ふくゆきハ其意義とく云ふ

十月以後十二月初まぐちくへ

元業と云ふ九月のあゝ取のれハ月に乾へし十月以後

様ものハ臨乾してよりと書ふハ元えより云ふ

夏秋とる業ハ日に乾し冬書とる業ハ臨干し

さり此業種落葉新芥らそきとハ久しく烈日

おあせハ氣うまくななりかえんとはり時をて收て

臨干へ

は月牡丹芍薬及竹花果木と云へし極てりと月

令廣義より元えより農政全書より云ふ果木と云

ゆの小え先九月乃中後樹のまかりとありて種と

以くまのりとやうけりたる所へハ肥土を入水と洗へ
！次年正月二月は種栽へ（さそく）の部は要し

い月桑と收獲へ一以今度穀よりく平後一桑と
取水多れ肉へ入くうくものと去日ふり海を
炒く冷し新壺へ入沙一重桑一重洗くよ地へ一壺
また一こ入る多きいり竹葉と地へいこと
と竹れおしろ乃どくたる和おしと地へてされ
いなる地へたれ壺とつむぎに多きあり酒桑より
づらるあられ又塩水一二杯浸し取おし日干し
胡麻と拌せ（かきまぜ）入壺へ一とそ又時水の中乃種人の

種より生桑桑と二月日ふり一も後能考く又日お
壺へ收りとり壺へ出くつりて味桑ありとあり
又大桑と生ふく脾へ壺より桑乃芽生むるあり
やさしきとあて壺へ入るよりなつるやとれ桑を
用さるや一桑れ芽やと小壺と一かけ壺の口
小なめさうさ海へなり一はの方と地へ付壺へ一芽
生せす久しくこゆりあり又桑生と桑へ入る
肉よりつる壺へくもさし
は比米穀と求貯へ一用多し
此月量と食るあられ痼疾となはる桑とくハ根を

